

平成 23 年 10 月 28 日

報道関係各位

三井不動産株式会社
東京ミッドタウンマネジメント株式会社

次世代を担うアーティスト・デザイナーを発掘
「Tokyo Midtown Award 2011」結果発表

10月28日(金)～11月27日(日) プラザ B1F メトロアベニュー展示スペースにて展示

東京ミッドタウン(事業者代表 三井不動産株式会社)は、“「JAPAN VALUE(新しい日本の価値・感性・才能)」を創造・結集し、世界に発信し続ける街”をコンセプトに街づくりを進めています。その活動の一環として、次世代を担うアーティスト・デザイナーの発掘を目的に、2008年より毎年「Tokyo Midtown Award」を開催しておりますが、今年も開催中の「Tokyo Midtown Award 2011」において、1,470点の応募作品の中から、グランプリ2作品を含む受賞作品13点が決定しましたのでお知らせいたします。

<Tokyo Midtown Award 2011 グランプリ受賞作品>

アートコンペ
「都市」



受賞作 : 『frames of emptiness』
受賞者 : 山本 聖子(やまもと せいこ)

デザインコンペ
「5」



受賞作 : 『縁起のいい豚貯金』
受賞者 : 藤本 聖二(ふじもと せいじ)

今年で4回目となる本アワードは、<アートコンペ><デザインコンペ>の2部門を実施。2部門総計1,470点の応募作品の中から、アートコンペではインスタレーション作品『frames of emptiness』、デザインコンペではテーマ「5」にちなんだ5円玉貯金箱『縁起のいい豚貯金』がグランプリに選出されました。

なお、入賞作品13点は、10月28日(金)から11月27日(日)までの約1ヵ月、東京ミッドタウン プラザ B1F メトロアベニューにて展示されます。また、11月6日(日)まで、来街された皆さまからの投票で人気作品を選出する「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」も実施。結果は11月7日(月)に東京ミッドタウン・オフィシャルサイトにて発表いたします。

■掲載時の一般の方のお問い合わせ先■ 東京ミッドタウン・コールセンター TEL : 03-3475-3100

【本件取材に関する報道関係の方のお問い合わせ先】

東京ミッドタウン PR担当
TEL:03-3475-3141 / FAX:03-3475-3144 (東京ミッドタウンマネジメント株式会社)

アートコンペ：「都市」

アートコンペの今年のテーマは、「都市」。多くの人がさまざまな目的で行き交う東京ミッドタウン内プラザ B1F「メトロアベニュー」を舞台に、東京ミッドタウンにふさわしい「都市のアート」を募集し、309 点の応募をいただきました。

さまざまなジャンルのユニークな作品の中から 4 点の入選作品を選出。入選者には制作補助金 100 万円を支給し、10 月 13 日(木)より作品の公開制作を実施。10 月 24 日(月)の最終審査を経て各賞が決定しました。

グランプリ

受賞作：『frames of emptiness』

受賞者：山本 聖子(やまもと せいこ)

略 歴：2004 年 大阪芸術大学芸術学部

美術学科立体コース 卒業

2006 年 京都造形芸術大学大学院

芸術研究科芸術表現専攻 修了



<作家コメント>

震災以降、私たちを取り巻く社会や価値観は大きく変化してしまった。

生活の根源を問わなければならない状況になったことは誰ひとりとして例外ではない。

私は作品を作る中で多くの人が間取り図に、安定や定住、画一化などのイメージを持っていることを知った。

しかし今、それらは過去のものとなり、絶対的なもので無くなったのではないだろうか。

単位としての間取り図、集合体としての間取り図は今、大きく揺さぶられている。

【アートコンペ概要】

テ ー マ：「都市」

応 募 期 間：2011 年 6 月 1 日(水)～6 月 21 日(火)

審 査 方 法：1 次審査(書類審査)→2 次審査(模型によるプレゼンテーション)→最終審査

審 査 員：児島やよい(フリーランス・キュレーター / ライター)

清水敏男(東京ミッドタウン・アートワークディレクター / 学習院女子大学教授)

土屋公雄(彫刻家 / 愛知県立芸術大学大学院教授)

中山ダイスケ(アーティスト / 東北芸術工科大学教授)

八谷和彦(メディア・アーティスト / 東京藝術大学准教授)

協 力：TOSHIO SHIMIZU ART OFFICE

パートナーアワード：ソシエテ ジェネラル Chinese Art Awards

賞：グランプリ(1 点) _____ ¥1,000,000

(賞 金) 準グランプリ(1 点) _____ ¥500,000

優秀賞(1 点) _____ ¥300,000

※上記賞の他、東京ミッドタウンマネジメント(株)が審査員となり、東京ミッドタウン特別賞
1 点を選出(賞金¥50,000)

※別途制作補助金 100 万円を支給

準グランプリ、優秀賞、東京ミッドタウン特別賞の作品については、添付参考資料(P.5)をご参照ください。

* パートナーアワード：ソシエテ ジェネラル Chinese Art Awards について

ソシエテ ジェネラル Chinese Art Awards とは、フランスの金融機関ソシエテ ジェネラルが、若手アーティスト育成事業の一環として 2010 年に創設した、35 歳以下のアーティストを対象とする現代アートアワードです。

若手アーティストを発掘し、活躍の場を提供することに重点を置くなど、「Tokyo Midtown Award」のコンセプトと共通点も多く、今回よりアートコンペのパートナーアワードとなりました。今後、日本と中国の有望なアーティストの活動をよりグローバルに助けることを目指し、具体的なコラボレーションの形を模索していきます。

2012年春に開業5周年を迎える東京ミッドタウン。今年のデザインコンペは、都心の上質な日常を彩る「5」にまつわるデザインを募集し、1,161点の応募をいただきました。

“デザイン力”、“提案(プレゼンテーション)力”、“テーマの理解力”、“消費者ニーズの理解力”、“商品化の可能性”を基準に応募シート(プレゼンテーションシート)を審査後、意匠権調査を経て、グランプリ・準グランプリ・優秀賞(各1点)、審査員特別賞(5点)、東京ミッドタウン特別賞(1点)の計9作品が決定しました。

グランプリ

受賞作: 縁起のいい豚貯金

受賞者: 藤本 聖二(ふじもと せいじ)

略歴: 1999年 山口大学工学部機械工学科卒業

2003年 穴吹デザイン専門学校インテリアデザイン学科卒業

現在 穴吹プロダクトデザイン学科担当教員として勤務
及び FUJIMOTOPRODUCTo として活動中

受賞歴: 2004年 大光電機株式会社主催 第8回あかり百人百灯展
特別賞



<作家コメント>

普段から財布の中に1枚は5円玉を残しておきたいという意識が自分の中ではありました。「ごえん」という響きに見通しのいい穴とあの色、日本人にとって縁起のいいものの象徴であるかのようなアイテムです。そんな5円玉とさらに重ねて縁起をよくしてくれる50円玉を貯えることでできる豚は、将来の生活を楽にしてくれるほどにはなりません、日々の生活を少し前向きにしてくれます。

【デザインコンペ概要】

テーマ : 「5」

応募期間 : 2011年7月5日(火)~8月5日(金)

審査方法 : 書類審査

審査員 : 小山薫堂(放送作家 / 東北芸術工科大学教授)

佐藤 卓(グラフィックデザイナー)

柴田文江(インダストリアルデザイナー)

原 研哉(グラフィックデザイナー / 武蔵野美術大学教授)

水野 学(アートディレクター)

協力 : 東京ミッドタウン・デザインハブ

賞 : グランプリ(1点) _____ ¥1,000,000

(賞金) 準グランプリ(1点) _____ ¥500,000

優秀賞(1点) _____ ¥300,000

審査員特別賞(5点) _____ ¥50,000

※受賞後、東京ミッドタウンが商品化のサポートを行います

※上記賞の他、東京ミッドタウン特別賞(1点)を選出し、受賞作品は、東京ミッドタウン5周年の際のノベルティとして制作予定です

準グランプリ、優秀賞、審査員特別賞、東京ミッドタウン特別賞の作品については、添付参考資料(P.8)をご参照ください。

東京ミッドタウン・オーディエンス賞

10月28日(金)～11月6日(日)の期間、来街者の一般投票で「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」を決定します。投票いただいた方の中から抽選で5名様に、2008年デザインコンペにて水野学賞に輝き、商品化された“富士山グラス”をプレゼント。受賞作品は、11月7日(月)に東京ミッドタウン・オフィシャルサイトにて発表いたします。

受付期間 : 10月28日(金)～11月6日(日)
投票場所 : プラザ B1F メトロアベニュー展示スペース

「富士山グラス」



※アートコンペ、デザインコンペの各受賞作品画像は、以下の URL よりダウンロードいただけます。
http://www.tokyo-midtown.com/press/index_press.html

Tokyo Midtown Award 2011 受賞作品

アートコンペ：「都市」

■グランプリ

受賞作：『frames of emptiness』
 受賞者：山本 聖子(やまもと せいこ)
 略歴：2004年 大阪芸術大学芸術学部
 美術学科立体コース 卒業
 2006年 京都造形芸術大学大学院
 芸術研究科芸術表現専攻 修了



<作家コメント>

震災以降、私たちを取り巻く社会や価値観は大きく変化してしまった。
 生活の根源を問わなければならない状況になったことは誰ひとりとして例外ではない。
 私は作品を作る中で多くの人が間取り図に、安定や定住、画一化などのイメージを持っていることを知った。
 しかし今、それらは過去のものとなり、絶対的なもので無くなったのではないだろうか。
 単位としての間取り図、集合体としての間取り図は今、大きく揺さぶられている。

■準グランプリ／東京ミッドタウン特別賞(※)

受賞作：『みえない景色』
 受賞者：木村 恒介(きむら こうすけ)
 略歴：2007年 武蔵野美術大学 卒業
 2009年 東京芸術大学大学院 修了



<作家コメント>

無機質な都市の景色を有機的に動くミラーの中に取り込み、
 改めて都市という景色を振り返る空間が創出します。作品の前に立ち、歪み続ける景色の中で何かを感じて
 もらえたらと思います。

※「東京ミッドタウン特別賞」・・・今年新設された「東京ミッドタウン街区内に相応しい作品」という観点で、東京ミッドタウンマネジメント(株)が審査し、決定する賞。この作品に限り、展示期間が2012年3月末までとなります。

■優秀賞

受賞作：『REC・NOW』
 受賞者：米元 優曜(よねもと まさあき)
 略歴：2010年 倉敷芸術科学大学芸術学部
 工芸・デザイン学科ガラス 造形コース卒業(首席)



<作家コメント>

都市のシンボルである高層ビルは、その全身に、周囲の景色をリアルタイムに映し続けている、巨大な映像メディアとしても機能しているのではないのでしょうか。
 私は、東京ミッドタウンを訪れる多種多様な人々の姿を高さ2mものガラスオブジェに映し出すことで、「都市」=「今」=「自己」であるということを伝えたいと思います。

■入賞

受賞作：『builds crowd』

受賞者：栗 真由美(くり まゆみ)

略歴：1998年 東京学芸大学大学院
美術教育工芸科 修了



<作家コメント>

小さな明かりを仕込ませた無数の建物。

それは、一つ一つが生活の息づきの象徴です。

そして、それらは集合体となり、光溢れる都市のように大きな輝きを放つでしょう。

<アートコンペ審査員総評>



梶島やよい(フリーランス・キュレーター / ライター /

慶應義塾大学、明治学院大学非常勤講師)

新しい展示スペースでの初のコンペとなる今回、可能な作品の幅が広がり、応募作品は力作ぞろいだった。特に今年は3.11を受けて、「都市」というテーマに真摯に向き合う作品が多く、心強くもあり身の引き締まる思いもしている。最終審査の4者の間には、展示経験の差がはっきり表れた感もあり、その意味でも、この貴重な経験を活かして活躍して欲しい。未知の観客が、作品とどんな出会いをしてくれるか、楽しみである。



清水敏男(東京ミッドタウン・アートワークディレクター / 学習院女子大学教授)

今年は展示場所がショーケースからアベニューに出たことでさまざまな変化があった。ガラスの境界がなくなったことで作品はミッドタウンの空間のなかに入っていく、表現が広がった。最終的に賞に残った作品はそれぞれ都市についてミクロの視点(山本氏:住宅の集積)、マクロの視点(米元氏:ガラスのスカイスクレーパー)、都市内部の視線(木村氏:通行人との対峙)を示し興味深い。応募作品の質も飛躍的に向上しますます重要なアワードとなったと思う。

Photo by Herbie Yamaguchi



土屋公雄(彫刻家 / 愛知県立芸術大学大学院教授 / 武蔵野美術大学客員教授)

いつの世もアーティストは、時代や歴史と対峙し社会の矛盾に直面しながら、新たなる価値の再発見のためにもがいてきた。そして今回我々は、東北を中心とした未曾有の災害・原発事故に見舞われた。それにより、今年は300点を越す応募作品の中から震災関連の表現が多く見られ、公開二次審査では選考意見も分かれ、議論は大いに白熱した。アート審査会における意見の拮抗は極めて重要である。なぜなら応募者一人一人の作品には個々の思い・精神・表現のダイナミズムが込められており、最終選考に残った方々の作品は、他と実力伯仲の末勝ち得た入賞だと考えている。



中山ダイスケ(アーティスト / 東北芸術工科大学情報デザイン学科教授)

アートは「叫び声」として戦災や災害などに対するリアクションになる事も多いですが、そもそもその存在が常に「予言的」な性格を帯びています。グランプリの山本聖子さんも、準グランプリの木村恒介さんも、原発事故以前から社会の歪みや仕組みの矛盾を無理なく作品化されていたので、私も今の世界への憂いととも、素直に向き合うことができました。こういう一見シニカルで良質な表現の裏側にこそ、大切なやさしさがあるのかもしれない。

Photo by Miura Haruko



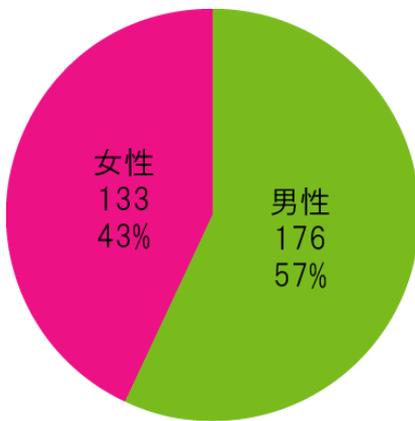
写真: 米倉裕貴

八谷和彦(メディア・アーティスト / 東京藝術大学准教授)

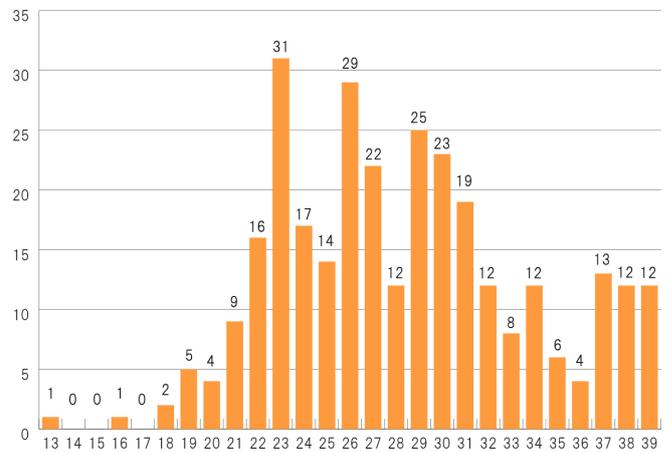
昨年までのガラスケースから移動し、今年は通路での展示となりました。展示に制約がある反面、作品保護はしやすいガラスケースとは異なり、今回はオープンスペースであるため、応募した方にとってはなかなか難しい条件だったと思います。しかし多くの作家がその場所性に負けない提案をしていただきました。そのことにまず感謝したいと思います。同時に今年の受賞作はそのような条件を乗り越えた多くの作品の中から選ばれた作品で、結果的になかなかの完成度で仕上がったと思っています。今回の展示作品が、目にする多くの人に愛され、何かを与えることができれば、といち審査委員として願っています。

<アートコンペ 応募者データ>

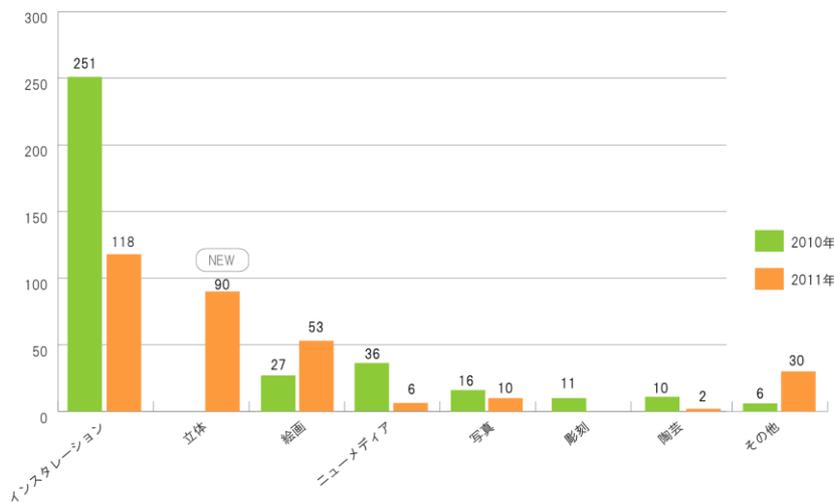
●男女比



●年齢分布



●応募ジャンル



■応募者数…309名(組)

■平均年齢…28.3歳

※応募対象年齢(39歳以下)以外を除く

■グランプリ

受賞作:『縁起のいい豚貯金』

受賞者:藤本 聖二(ふじもと せいじ)

略 歴:広島県出身

穴吹デザイン専門学校プロダクトデザイン学科担当教員

及び FUJIMOTOPRODUCTo として活動中

<作品コンセプト>

「ごえん」という響きに見通しのいい穴とあの色、日本人にとって縁起のいいものの象徴であるかのようなアイテム。そんな5円玉とさらに重ねて縁起をよくしてくれる50円玉を貯えることのできる豚は、将来の生活を楽にしてくれるほどにはなりません、日々の生活を少し前向きにしてくれます。



■準グランプリ

受賞作:『おやゆび』

受賞者:椿本 恵介(つばきもと けいすけ)

略 歴:埼玉県出身

武蔵野美術大学 基礎デザイン学科 3年在籍

<作品コンセプト>

親指一本分の優しさと温もりをもつフォーク。

食事を楽しむことができ、乗せた食べ物を支えることができる。

現代では、人の関わりが見えにくい都会で、食物は人の手で

育てられ、運ばれ、調理されていることを忘れがちになる。

このフォークは食事をする事で人の手によって食文化が支えられていることを優しく教えてくれる。



■優秀賞

受賞作:『5の抱きまくら』

受賞者:中谷 仁美(なかににひとみ)

略 歴:大阪府出身

京都工芸繊維大学 工芸科学部 3年在籍

<作品コンセプト>

5の形を生かした抱き枕です。



<審査員特別賞>

■小山薫堂賞

受賞作:『ゴメンバコ』

受賞者:pluth

(高木 剛 / たかぎ つよし・橋村 瞳 / はしむらひとみ)

略 歴:高木 剛・東京都出身

2003年日本大学理工学部建築学科卒業 / デザイナー

橋村 瞳・東京都出身

2009年千葉大学工学部デザイン工学科卒業 / デザイナー

<作品コンセプト>

今、私たちは、謝ることをつい簡単に済ませてしまいがち。

電話やメールでの簡易的・形式的な謝り方が溢れ、直接会って心をこめて謝る気持ちが麻痺してきています。

そこで、誰かに何かを謝りたいときに「ごめんね」を直接心をこめて伝えに行く“きっかけ”を生み出したいと考えました。このゴメンバコは、ふたりで再び笑いあうための“きっかけ”です。



■佐藤 卓賞

受賞作:『ごめんたい』

受賞者:伊藤 里実(いとう さとみ)

略 歴:青森県出身

2007年武蔵野美術大学 造形学部

視覚伝達デザイン学科卒業

株式会社モンテール所属 / デザイナー

<作品コンセプト>

明太子5種類セット。5面体(ごめんたい)のケースに入っています。

謝罪したい相手に向けて、襟を正し、素直な気持ちで、「ごめんたい…」と手渡ししましょう。

その潔さと、美味しい明太子で、思わず許してしまうでしょう。



■柴田文江賞

受賞作:『ダイヤモンド砂糖』

受賞者:ninkimono!

(今津 康夫 / いまづ やすお・菅野 亘 / すがの わたる)

略 歴:今津 康夫・山口県出身

2001年大阪大学大学院建築工学科卒業 / 建築家

菅野 亘・兵庫県出身

1999年甲南大学中退 / デザイナー

<作品コンセプト>

角砂糖の重さは一般的には5gだそうで、この5gにミッドタウンの

5周年をかけて5角形のダイヤモンドカットを施したメモリアルな砂糖をデザインしました。カラット計算でいうと25カラット相当と成るこの世界一甘いダイヤモンド。この白く甘いダイヤを添えることで、六本木に憩う皆様の時間がいつもより少しだけ甘く輝くひとときとなれば幸甚の至りです。



■原 研哉賞

受賞作:『おもいづみ』

受賞者:三山(田島 大成 / たじま たいせい・森山 隆史 /

もりやま たかし・篠崎 健吾 / しのざき けんご)

略 歴:田島 大成・富山県出身

森山 隆史・岡山県出身

篠崎 健吾・栃木県出身

3名ともに、多摩美術大学 造形表現学科3年在籍

<作品コンセプト>

一枚に五つの文字しか書けない手紙。

本当に伝えたいことは、だいたい五文字。

ありがとう。ごめんね。おめでとうなど言葉を吟味し、相手を思い、自分の字で丁寧に書き記す。

日々の暮らしのなかで言い忘れた言葉、本当の気持ちをたいせつな人に伝える手紙。



■水野 学賞

受賞作:『4+ ～子どものための包帯～』

受賞者:朝比奈 信弘(あさひな のぶひろ)・澤田 翔平(さわだ しょうへい)・佐々木 辰憲(ささき たつなり)

略 歴:朝比奈 信弘・神奈川県出身

2007年千葉大学大学院 自然科学研究科デザイン専攻卒業

澤田 翔平・神奈川県出身

2010年武蔵野美術大学 基礎デザイン学科卒業

佐々木 辰憲・香川県出身

2007年エスモード・ジャポン東京校 総合科メンズ専攻卒業



<作品コンセプト>

包帯には「怪我」というイメージが定着しているため、包帯を巻いているだけで、周囲の人は「怪我人」として認識してしまいます。

子どもの感受性は高く、包帯を見ると大人以上に「怖い・痛い」感情を連想してしまい、心にストレスを与えているのではないのでしょうか。

怪我や疾患で包帯を巻くことを余儀なくされる子どもたちのストレスを少しでも和らげるため「四肢のケア」に「心のケア」をプラスして、子どものための包帯 4+ をデザインしました。

<東京ミッドタウン特別賞>

受賞作:『節電球』

受賞者:浅木 翔(あさぎ かける)・長砂 佐紀子(ながすな さきこ)

略 歴:浅木 翔・神奈川県出身

2010年多摩美術大学 美術学部グラフィックデザイン学科卒業

/ 株式会社電通 関西支社 TOKYO ROOM 所属

長砂 佐紀子・奈良県出身

京都工芸繊維大学 デザイン経営工学課 4年在籍

<作品コンセプト>

節電球は、節電を呼びかけるための、5時間分のろうソクです。

ろうソクを電球の形にすることで「電気の代わりにろうソクを」という意識を生み出します。

また5時間という時間設定をすることで、節電時間を視覚的に感じることができます。

小さな灯りが消えるまでの5時間。日本のことを想う素敵な時をお過ごしください。



※今後この『節電球』は、東京ミッドタウン5周年のノベルティとして制作予定です。

<デザインコンペ審査員総評>



Photo by Hiromi Shinada

小山薫堂(放送作家 / 脚本家 / N35inc・(株)オレンジ・アンド・パートナーズ代表 / 東北芸術工科大学デザイン工学部企画構想学科長)

ミッドタウン5周年にちなんで出された「5」というテーマ。主催者側の一方的な都合で出されたこのテーマが果たしてどこまで広がるのか？実は僕自身、疑問を抱きながら審査に臨んだのですが・・・いい意味で裏切られました。

「正」「5本の指」「五大陸」「ご縁」「ごめん」「さしすせそという5つの調味料」「合格」などなど、世の中にはこんなにたくさんの「5」が溢れていることに気づかされました。

一流のデザイナーにはアイデアを発想する力が必要です。けれどもアイデアがデザイン力を越えてしまうと、その形は死んでしまう。

アイデアとデザイン・・・その絶妙のバランスが、美しい形を生み出すのだと今回の審査を通して改めて実感させられました。

とにかく、今回の審査は今までの中で一番面白かった。みなさんに拍手を送ります。

そして「5」というテーマにケチをつけてしまったことを、ミッドタウンに謝ります。

佐藤 卓(グラフィックデザイナー / 佐藤卓デザイン事務所 代表取締役)

このコンペは、選出された作品の中から、商品として成立しそうな物を製品化することを前提にしたユニークなコンペです。つまり作品には、まず一見して人を引きつける魅力的なアイデアが必要になります。そしてさらにデザインの良し悪しがあって、その上で商品化した時に売れそうかどうかという視点でも審査されます。はっきり言って、いいデザインが売れるとは限りません。そもそも、いいデザインとは何を指して言うのかというやや難しい問題がそこには潜んでいます。このコンペはそういう難しいことはちょっと抜きにして、「これ面白いんじゃない？」という直感で、たぶん審査員のみなさんが審査していると思います。そこが、他のコンペと違うユニークなところかもしれません。

それにしても今年も、まったく同じアイデアの作品がいくつも出品されていました。本人達はきっと、自分だけの天才的なアイデアだと思って応募してきていると思いますが、実はみんなが思いつくことって、けっこうあるわけですね。私も普段から気をつけたいと思います(笑)。



柴田文江(インダストリアルデザイナー / Design Studio S 代表)

これといって何か問題を解決しようと言うわけでもなく、大きな社会性を備えているわけでもないけれど、ここにあるのは紛れもなくデザインだ。暮らしの中のやすらぎ、使う度に感じる楽しさ、時間を誰かと共有する喜び、そんなポジティブなメッセージを発信しつづけることもデザインのひとつの役割だからだ。

今年は、テーマ「5」の縛りの中で苦労している様子が多く見られて興味深かった。何かを発想する時には、本題と必ず全く関係の無い事象がひらめきにつながることもあり、そのきっかけにテーマ「5」を取り込めた作品が上位に残ったように感じた。



原 研哉(グラフィックデザイナー / 武蔵野美術大学教授 / 日本デザインセンター代表)

「5」というテーマを前提に選考を重ねたわけだが、製品になって店頭に並んだ商品は「5」というテーマから切り離された存在になる。確かに、ミッドタウン5周年の記念商品という位置づけなのだろうが、できれば「5」から自立してもその魅力が持続するものが賞にふさわしいのではないかと思った。

そういう意味ではグランプリも準グランプリも「5」にちなんではいれるものの「5」から自立しても、素敵な商品になってくれるのではないかと思う。この賞も4回目になるが、他のデザイン賞にはない、のびのびとした作品に触れる事ができて、気持の晴れる審査会であった。





Photo by Eiki Mori

水野 学(アートディレクター / クリエイティブディレクター / good design company 代表)

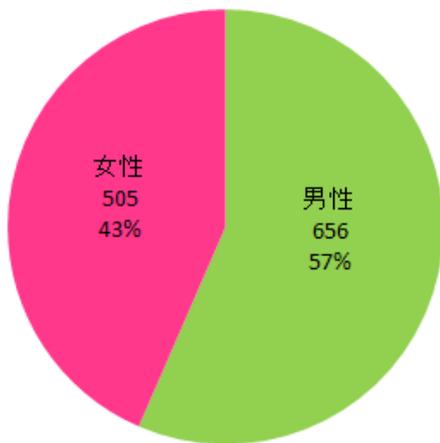
3月11日に発生した東日本大震災により、被害を受けられた皆さまに、心よりお見舞いを申し上げます。今まで築いてきたものが、一瞬にしてゼロに押し戻されてしまうような大災害がこの日本を襲いました。

この未曾有の被害を経験した私たちが今やるべきことは、「つくる」こと。人類は太古の昔よりモノを「つくる」ことで新しい文明を拓いてきました。新しくモノを「つくる」こと、それこそがデザイン。この年に、デザインのコンペティションが行われ、たくさんの応募があったことは、この国にとって一つの希望になると言っても過言ではないはずです。

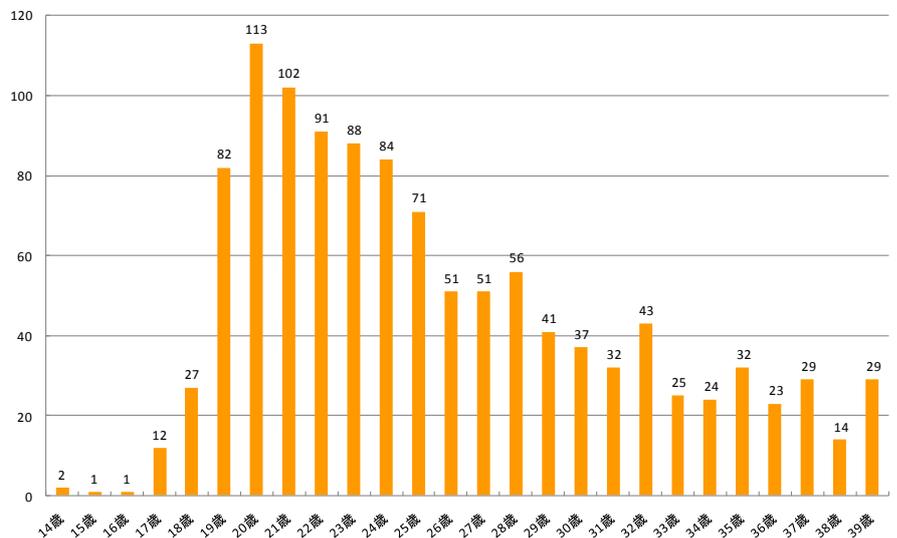
受賞者の皆様、残念ながら受賞を逃した皆様、一緒にこの国をつくり続けていきましょう。

<デザインコンペ応募者データ>

●男女比



●年齢分布



■応募者数…1,161名(組)

■平均年齢…26.5歳 ※応募対象年齢(39歳以下)以外を除く